

B：宮城県コース

倉谷 昌克 (1979・法)

既に報道等で知っていたとはいえ、現実の被害状況を目の当たりにして、圧倒的な自然の力と脅威、人工のものがなんとはかなくちっぽけなものであるかという事を痛感させられた次第です。そして表面的には建設工事は進んでいるようにみえましたがそれはあくまで復旧であり、この地域の人たちが将来に亘って安心して暮らしていけるという復興とは違うように感じられました。それはこの地で被災した企業の構成が中小企業中心であり、震災前から他の地方都市の中小企業同様決して楽ではなかったからです。この震災により経営者は形だけ復旧しても問題が解決しないことをわかっており、事業意欲を失っている。働く側も将来に亘る展望が持てない以上若者は街を去り、他の者は目先補助金とのバランスで勤労意欲を失い、町全体が意気消沈してしまっている。たとえばIPS特区としてこの地に研究施設関連事業を相当の優遇策をもって誘致し育てていくとか、さらに思い切って首相官邸と国会をこの地に持っていくとか、そういうことをしないとこの地域いや日本の苦境は乗り切れないのではないか。世界が注目しているのである。